

聴覚障害児のオノマトペ使用に関する一考察

田中 優子

高等部の聴覚障害生徒に、よりハイレベルな表現力を身につけさせていくためには、教材や教え方の更新が常に求められる。そのためには聴覚障害生徒の表現の傾向や問題点を明らかにし、その要因を探っていくことが必要である。その試みの一つとして、本研究ではオノマトペの使用傾向を調べた。2つの異なる写真を見せて、それを作文で描写させるという方法をとった。15人の高等部生徒を対象とした小規模な調査で擬音語と擬態語の使用傾向を検証し、今後更に大きな調査へとつないでいくことが目的である。今回の調査からは、擬音語と擬態語の現れ方に明らかな違いが見られたが、その違いには擬音語と擬態語ということ以外の要因も推測された。今後の調査に向けた課題や更に掘り下げたい点がいくつかみつかったことで、次の調査・研究につながる成果が得られた。

キー・ワード：聴覚障害生徒 オノマトペ 擬音語 擬態語

1 はじめに

澤・相澤(2009)では、先行研究を参照しつつ、聴覚障害児の作文に見られる表現上の問題について触れている。そこでは聴覚障害児の作文について、年齢が上がるにつれて書きたい内容が豊富になるが、表現する力が伴わずに読み手に対して自分の考えが十分に伝わりにくいという問題が指摘され、事物や事象の様態を表現する形容詞の使用の特徴を明らかにする意義が述べられている。当該研究では、小学部から専攻科までの聴覚障害児童・生徒を対象にした調査が行われ、感情形容詞よりも属性形容詞の使用が多いことや、一作文における形容詞の使用は中学部以上で増加し、その後横ばい状態であること、また誤用の傾向などについて報告されている。

本研究では、このような形容詞と同様に、事物や事象の様態を表現するものとして、聴覚障害生徒の作文におけるオノマトペの使用について報告する。なお、オノマトペについては彭(2007)、西村・竹内(2011)のように日本語学習において、その教育の重要性を述べている先行研究が見られる。聴覚障害児の教育における研究では、館山・鄭・松本(2008)が乳幼児期の言語理解と表出においてオノマトペの役割について触れている。また、南出・沖田・善(2002)

のように聴覚障害生徒によるオノマトペの理解についての研究も見られる。更に遡れば長南(1995)では絵の内容を伝える表現として副詞的表現を扱っている。しかしながら、近年、聴覚障害生徒の大学進学率も高くなり、よりハイレベルな教育が求められている。2020年に改定になる学習指導要領でも、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」が重視されることとなる。教育の場でも、聴覚障害児童・生徒のハンデを補うだけでなく、よりハイレベルな表現力をどう身に着けさせるかが探究されていくだろう。そのためには今現在の聴覚障害児童・生徒の力を把握し、問題点の所在を明らかにし、要因を探っていくことが必要である。田中(2017)ではその試みの一つとして、聴こえる児童・生徒との比較を通して、聴覚障害児童・生徒の使う理由の表現に注目した研究を行った。その際により広範囲な表現の使用傾向を調査・分析する必要性を感じた。本研究はその一環として、オノマトペを扱う調査のいわばプレ調査として行った小規模な調査の結果を報告するものである。

2 調査の概要

調査は2018年11月に筆者の勤務先の聴覚特別

支援学校高等部の国語科の授業において作文の授業の一環として行った。2枚の写真(Fig.1,2)をタブレット端末にネットからダウンロードし、それを高等部3年生の生徒合わせて15名に見せ、それぞれの写真がどう見えるかを書かせた。Fig.1は木が雨に打たれている写真で、たくさんの葉が画面いっぱいに広がり、かなり激しい雨がその葉に降り注いでいる様子を写したものである。Fig.2は「幸せのパンケーキ」という名称で売り出されているパンケーキの写真である。それぞれの描写において使われたオノマトペや、各作文の文の数、また、オノマトペ以外に使用された比喻表現等をまとめたものがTable 1とTable 2である。



Fig. 1 雨の写真



Fig. 2 パンケーキの写真

Table 1 雨の描写に使用されたオノマトペ

No	文	描写に使用された表現
1	1	(×光条のような)
2	4	ぽたぽた
3	8	
4	4	(シャワーのように)
5	2	ザーッと
6	3	ざあざあと
7	4	(どしゃぶりの)
8	1	
9	2	
10	3	(直線的に)
11	2	(脈を打つようなスピード)
12	2	(シャワーのような)
13	6	(打ち付けるように)
14	4	
15	1	

※オノマトペ以外は()書き。間違いは×。

Table 2 パンケーキの描写に使用されたオノマトペ

No	文	描写に使用された表現
1	2	
2	5	ふわふわとした、(雲のような)
3	7	ふんわりと、シュワッと、ふっくら
4	10	ふんわりと
5	2	フワフワ
6	5	ふわふわで
7	7	ふわふわしていそうな
8	1	ふわふわのような、×もちもちのような
9	3	
10	4	ふわふわしていて
11	2	
12	6	ふっくらした
13	9	ぷっくりとした
14	2	
15	2	ふわふわの

3 結果と考察

(1) 結果

雨とパンケーキ、それぞれの描写に使用された文の数の総数は、47 と 67 で、後者の方が多い。また、使われたオノマトペも前者は 3、後者は 13 と、明らかに後者の方が数が多い。また、前者ではオノマトペ以外の表現で雨の様子を描写した例が 7 例あった。なぜこのような顕著な差が見られたのだろうか。

(2) 擬音語と擬態語の違い

雨が降る様子を描写するのに使われた 3 例は「ぼたぼた」「ザーッと」「ざあざあと」である。それぞれ、次のように使われた。

雨-2 葉に乗った白い雪がぼたぼた落ちる。

雨-5 雨がザーッと降る音と雨水が葉から滴り落ちる音が聞こえてきそうな写真である。

雨-6 青々しい葉っぱたちが目一杯に写っていて梅雨がざあざあと葉の上から激しく降っている。

※表現等の間違いは直していない。

「ぼたぼた」は小学館のデジタル大辞泉には「しずくが次々に落ちる音や、そのさまを表す語」と説明されており、擬音語とも擬態語とも取れる語であるが、「ざあざあ」や「ザーッと」は明らかに雨の音を表現した擬音語である。この 3 例を使用した生徒達は難聴ではあるが、比較的聴覚活用をする生徒達で、音楽も聴き、手話の助けがなくてもある程度の会話ができる生徒達である。擬音語に関しては、聴覚障害生徒の場合、その聴力の程度によっても使い方が異なることは推測できる。聞こえない生徒にとっては、その表現を読んで理解語彙となっても、使用語彙とすることに難しさがあることは不自然なことではない。擬音語を使わない代わりに「シャワーのように」「直線的に」「どしゃぶりの」など、視覚的な表現で描写する傾向があることから、音の描写の不足を補っていると解釈することもできる。このように、擬音語を使わない場合にどのような表現を用いているかという視点も聴覚障害生徒の表現傾向を把握していく上では非常に重要であり、興味

深い点でもある。改めて条件を整えて検証する必要がある。

一方のパンケーキの描写は「ふわふわ」「ふんわり」など、その柔らかさや膨らんだ様子を表す擬態語である。15 人中 11 人が「ふわふわ」「ふんわり」「ふっくら」「ぷっくり」という同種の擬態語を使っていることから、彼らが日常的によくこれらの語を使っていることがうかがえる。例をいくつか挙げる。

パンケーキ-3 お皿にふんわりとのせられたパンケーキ。

パンケーキ-5 少し茶色の焦げ目がついたフワフワやわらかそうなパンケーキにはアイスやシロップが沿えられ、粉砂糖がかけられており、それらが生地本来の甘さを引き立ててくれている。

パンケーキ-12 ふっくらした 3 枚の上にアイスクリームがトッピングされている。

(3) 心理的要因

雨とパンケーキの写真それぞれの描写のしやすさという要素も考慮すべきであろう。どちらが描写するにあたって生徒達のモチベーションを高めるかということである。同じ生徒が書いたそれぞれの作文を比べてみる。

雨-4 画面いっぱい、青々とした葉のたくさんついた枝でうめつくされている。その上から、雨がシャワーのようにふりそそいでいる。これまた画面のうめつくさんばかりのいきおいである。上のほうは太陽の光を反射して白く輝いているように見える。

パンケーキ-4 ふんわりとふくらんだ、あわいレモン色のパンケーキが三枚、白い皿の上に少しずつ重なった状態で置かれている。やわらかな焼き目がついており、食欲をそそられそうだ。きつね色の上に点々と粉ぎとがかかっている。ちょうど上から一枚目と二枚目のパンケーキにかかる形で、半球状のバニラアイスがもりつけられている。少し溶けているようにも見える。全体のやわ

らかな色彩を引きしめているのが、バニラアイスの上にのせられたミントの葉だ。あざやかな緑。そのパンケーキのうしろに、シロップやはちみつやらがよく入れられているアレがおいてある。でも中は見えない。それでも、きっと、その中には黄金色に輝くメープルシロップが入っているはずだと私は信じている。

作文の分量も異なるし、パンケーキの描写の方が生き生きとしている印象を受ける。たくさんの葉が雨に打たれているだけの何の変哲もない写真と、いかにも美味しそうな三段重ねの分厚いパンケーキでは、描写にあたって書き手の意欲が変わることは十分考えられる。パンケーキにかかっているアイスクリームやミントの葉、添えられているメープルシロップなどの描写も雨と葉としぶきに比べると全体的に細かく描写される傾向が見られた。もちろん、こういう写真や絵にモチベーションが高まるかも個人差があり、雨の風景に芸術的な嗜好を揺さぶられる生徒もいるかもしれないため、一概には言えないが、このような心理的な要因で描写の豊かさに違いが出る可能性も考えられるため、文字数を決めるなど、ある程度の条件をそろえ、見せる写真をもっと増やすなど、今後の調査において考えていかなければならない。

(4) 一般的な使用頻度

「ざあざあ」も「ふわふわ」も日常的に使われる語だと考えられるが、実際はどうであろうか。小学校の国語の教科書で使われるオノマトペを調査した岡谷(2015)で、小学校国語教科書で使用されているオノマトペをその使用の範囲と頻度で 88 位まで順位付けした表があるが、その表の 19 位に「ふわふわ」があるのに対して、「ざあざあ」は載っていない。聴覚障害生徒の語彙力がそれまでの学校教育の積み重ねに拠るところが大きいと考えるなら、その表で同順位にある「こんこん」と「つるつる」などの表現を引き出せるかどうかといった視点も必要だと考えられる。

なお、国立国語研究所(2007)が web 上で公開している日本語学習者のための学習教材には「ざあざあ」は載っているが、「ふわふわ」はなく、代わりに「ふっくら」がある。「ふわふわ」は上記のように小学校国語教科書でも頻出のオノマトペであり、それが収録されていないことに少々不足を感じるが、この学習教材は例文や使い方の説明だけでなく、漫画による補足説明もあり、「ざあざあ」に関してはテレビを消した後の画面の音と雨の音の 2 つを漫画で紹介している。非常に丁寧に作られており、わかりやすい。日本語学習者だけでなく、聴覚障害児童の初等教育にも利用できそうな質の良い教材であることを合わせて報告する。

4 まとめと今後の展望

以上のように、今回の調査は 15 人の生徒を対象とした小規模な調査ではあったが、擬音語と擬態語の出現の仕方にはっきりとした差が見られたことから、聴覚障害と擬音語の使用の関係については、聴こえる生徒との比較調査が必要であると考ええる。その際には調査対象となる生徒数も増やして、調査の精度を上げていく必要がある。また、今回の調査によって、調査で使用する写真や絵の題材の選定や、その選定にあたって考えるべき、使用が想定されるオノマトペの選定についての注意点など、課題や、分析において注目すべき点などが抽出できた。このことは今回の調査の成果と考え、今後の継続調査に活かしていきたい。

〔参考文献〕

- 長南浩人(1995)ろう学校高等部生徒の手話と日本語の副詞的表現の使用に関する研究—絵の内容を伝える課題において—。聴覚言語障害,23(3),121-129.
- デジタル大辞泉(2018)
- 彭飛(2007)ノンネイティブから見た日本語のオノマトペの特徴。日本語学,26(7),48-56.
- 国立国語研究所(2007) 擬音語って？擬態語って？日本語を楽しもう！

<https://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope/index.html>, (閲覧日 2018 年 12 月 26 日) .

南出好史・沖田めぐみ・善亜沙美(2002)聴覚障害
生徒における擬音語・擬態語の理解.聴覚言語障害,
31(1),19-25.

文部科学省(2018)新しい学習指導要領等を目指す姿.
[http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c
hukyo3/siryo/attach/1364316.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c
hukyo3/siryo/attach/1364316.htm), (閲覧日 2018
年 12 月 26 日) .

西村由美・竹内和広(2011)目的別日本語教育に
おけるオノマトペ表現の重要性. 言語処理学会
第 17 回年次大会 発表論文集,1011-1014.

岡谷英夫(2015)小学校国語教科書に見るオノマト
ペと日本語教育.人工知能学会論文誌,30(1),SP2-
F,257-264.

澤隆史・相澤宏充(2009)聴覚障害児童・生徒の作文
における形容詞使用の発達的特徴.障害科学研究,
33,1-12.

田中優子(2017)健聴児と聴覚障害児による作文の比
較－理由の表現－.筑波大学特別支援教育研
究,11,9-16.

館山千絵・鄭仁豪・松本末男(2008)聴覚障害幼児の
象徴遊びと母子相互作用の発達 に関する研究.障
害科学研究,32,11-19.